

記

日本佛教綜合研究学会 第3回例会 「禅と密教から見直す中世仏教」

開催趣旨

中世仏教の総体的把握を目指す立場から、いわゆる鎌倉新仏教論の限界が叫ばれて久しい。しかし、いわゆる顕密仏教論もまた、異なった視角からの検証が必要な段階に来ている。こうした状況を克服し、さらに多面的な仏教研究を進展させるうえで、今回は近年研究の進展が著しい中世における禅と密教の関係を取り上げてみたい。

日本中世の禅については、鎌倉時代初頭における栄西・道元らの大陸禅の導入以前からの系譜に注目しつつ、いわゆる「純粹禅」への展開を批判的に再検討する研究が相次いでいる。その中で、天台学や密教をベースとしながら密との関係を考察し、日本仏教の総合化を図ろうとする動きが従来考えられていたよりもはるかに活発に南北朝期まで展開していたことが分かつてきた。そのような研究動向を開いたきっかけの一つとして、名古屋市真福寺大須文庫所蔵資料の調査が進んだことは特筆される。その成果は『中世禅籍叢刊』全12巻（臨川書店）を通じて紹介され、東福寺円爾から癡兀大慧を経て同寺開山能信にいたる、禅と密教の関係をめぐる活発な研究と文献形成の足跡が明らかになりつつある。

本シンポジウムでは、このような最新の成果を踏まえながら、従来の宗派や研究領域の枠組みを超えて、歴史学・仏教学・思想史などさまざまな分野の知見を交換し合い、禅と密教の関係を通じてダイナミックな中世仏教の構造を探ってゆきたい。

会場：東京大学本郷キャンパス 法文2号館2階 教員談話室

開催日：2019年7月28日（日）

参加費：500円 来聴歓迎

プログラム

13:00 会長挨拶・趣旨説明

13:10～13:40 田戸大智（早稲田大学）「高野山における禅の受容」

13:40～14:10 高柳さつき（中村元東方研究所）

「『宗鏡録』と日本中世禅—『教月要文集』における『宗鏡録』の受容—」

（休憩）

14:20～14:50 和田有希子（早稲田大学）

「中世思想世界は禅の何を必要とし何を受容したか

—円爾とその周辺をめぐって—」

14:50～15:20 永井 晋（関東学院大学）「『吾妻鏡』にみる鎌倉の仏教—鎌倉における栄西—」

（休憩）

15:30～15:50 小川隆（駒澤大学） コメント

15:50～17:00 質疑・討論 司会：原田正俊（関西大学）・菊地大樹（東京大学）

・例会実行委員 原田正俊・菊地大樹